あじびコレクション展

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

福岡市・ヤンゴン市
姉妹都市締結記念

ようこそ、ミャンマー美術へ！

2017年8月31日（木）～ 2018年1月9日（火）
アジアギャラリー

2016 年 12 月、福岡市とヤンゴン市は姉妹都市の締結をしました。それを記念し、本展では、19 世紀末から現代までのミャンマー美術のあゆみを約 30 点の所蔵作品でふりかえります。

福岡アジア美術館では、1999 年の開館当初からミャンマー美術の紹介、また作家を招聘して作品制作をおこなうなど美術交流を続けてきました。現在、当館ではアジア 23 ヵ国・地域の近現代美術作品を 2900 点所蔵していますが、そのうち 71 作品（36 作家）がミャンマーの作品です。本展では、英領時代にミャンマー最後の王朝の宮廷を描いた洋風絵画から、黄金のパゴダに代表される麗しい仏教国のイメージ、そして社会問題に関心をおいた現代の作品などを紹介します。また、これまで福岡に滞在して作品制作をしたミャンマーの作家についてもあわせて紹介します。

▲ サヤー・ポン「シュエダゴン・パゴダ」1917 年頃

ミャンマーといえば、パゴダ！

ヤンゴンの街にそびえるシュエダゴン・パゴダ。町のあちこちから、光り輝く黄金の仏塔が見えます。絶えず、熱心な参拝客が訪れ、ヤンゴン最大の観光地でもあります。そんなヤンゴンの町を象徴するシュエダゴン・パゴダは、異なる時期の作家たちの眼にどのように映ったのでしょうか。

▲ ナインウィン
「シュエダゴン・パゴダの西入口」1985 年
▲ ニェインチャンスー
「シュエダゴン・パゴダの壇上」1998 年

英領期の洋風画

1886 年、ビルマ（現ミャンマー）全土が英領インド帝国に併合され、最後のコンバウン王朝は滅びました。この王朝に仕えていた宮廷画家の末裔たちは、王朝の家族や仏陀の生涯を描いた絵画を、仏教の祭事（僧侶の葬式など）で展示するようになりました。背景の町並みは奥行きのある西洋画的な空間表現がなされる一方、前景の人物像はミャンマーの伝統的な操り人形を思わせる姿で描かれています。そして、次第に写真の影響を強く受けて、より人物の表情が写実的になっていきます。

▲ サヤー・ソオ
「王室の肖像」19 世紀末～ 20 世紀初頭
▲ サヤー・タウン
「塀越しの恋」1910-20 年代頃
▲ ウ・ターフラ
「室内」19 世紀末～ 20 世紀初頭
▲ サヤー・ミッ
「ナッ王」「牛車」1953 年頃

20 世紀前半になると、宗主国であるイギリスの美術の影響を受け、ヨーロッパへ留学したウ・バニャン（1897-1945）やウ・バジ（1912-2000）らによって、西洋的な手法を取り入れた近代絵画が展開していきました。

独立後の美術

1948 年の独立後は、1952 年に国立美術学校（ヤンゴンとマンダレー）、および国立美術館が設立され、美術をめぐる制度が整えられていきます。風刺漫画家としても幅広く活躍したポーウーテッや抽象画にいち早く取組んだウ・キンマウン（現在、シンガポール国立美術館に当館所蔵作品を貸出中）らは、独立後の第一世代の画家として、現在活躍する作家たちの師となっています。1985 年に福岡市美術館で開催した「第 2 回アジア美術展」には、ナインウィンやテインルインら、アカデミックな手法で描いた絵画を中心に 20 名の画家が出品しました。

▲ ポーウーテッ
「女性像」1966 年
▲ テインルイン
「市場の日」1985 年
▲ ミン・ソー
「牛車の旅」1985 年
▲ チーミンソー
「小道と私」1994 年
▲ フラチュー
「ラーマーヤナからの一場面」1985 年
▲ キンマウン
「タウンジー風景」「中央ビルマ」1976 年

現代の作家たち

1980 年代以降、それまで伝統様式を踏襲したり、写実的・具象的な絵画が主流だったミャンマーで、現代の社会の変化をいち早く察知し、それを反映させたメッセージ性のある作品や抽象画やシュルレアリスムなどの新しい表現を模索する作家たちが登場します。そうした新しい試みをしたグループのひとつが「ガンゴー・ヴィレッジ・アート・グループ」でした。

1988 年の大規模な民主化要求デモにより社会主義体制が崩壊します。続く 90 年代からの軍事政権時代は、発言や表現が必ずしも自由とはいえない状況の中で、作家たちは展覧会を開催するのではなく、一緒にギャラリーを開いたりして表現の場を作り、活動を続けてきました。2000 年代に入ると、若手作家たちはグループやギャラリーでまとまるのではなく、多様な方法で情報を収集し、個々人のネットワークを駆使して、国内のみならず隣国のタイやシンガポールなどでも発表の機会を得ていきました。当館の「福岡アジア美術トリエンナーレ」でもそうした若手作家たちを紹介してきました。

▲ ミンウェーアウン「うちへ帰ろう」1994 年
▲ ミンウェーアウン「傘を差す僧」1996 年
▲ イェーミィン
「精霊ナッ（カーリー女神）」1996 年
「精霊ナッ（ウ・シン・ジー）」1996 年
「精霊ナッ（ウ・ティン・テー）」1996 年
▲ イェーミィン「仮面 96」1996 年
▲ アウンミン「聖なる人」1996 年
▲ ニェレイ
「制限された事柄の関係性－4」2010/2012 年

ニェインチャンスー「すいか」1998 年 ⇒

ガンゴー・ヴィレッジ・アート・グループ

ラングーン文理科大学（現在のヤンゴン大学）内にあった美術クラブを母体に、同大学の学生や卒業生を中心に 1979 年に発足したミャンマー最初期の現代美術グループです。1988 年の大規模な民主化運動以降、活動を一次休止しますが、2000 年に再開してから現在まで続いています。今年 2017 年には、「第 28 回ガンゴー・ヴィレッジ展」が開催されました。ここで紹介する 4 作家は、その初期からのメンバーの近作です。

▲ サンミン
「競争」2003 年
▲ キンスウェーウィン
「飛び込む人」2000 年
▲ フラトゥ
「ラングーン文理科大学と銀の月」2008 年
▲ ティト
「話」2006 年

福岡アジア美術館に来たミャンマー作家たち

福岡アジア美術館には、これまで多くのミャンマー作家が「美術作家招聘事業」や福岡トリエンナーレの「交流プログラム」で滞在し、作品制作やパフォーマンス、ワークショップをおこなってきました。2004 年に当館で滞在制作したミョタンアウンをはじめ、パフォーマンスの映像記録もあわせてご紹介します。

1999 年　ポゥポゥ（第 1 回福岡アジア美術トリエンナーレ）
2002 年　トゥンウィンアウン（第 2 回福岡トリエンナーレ）
　　イェミャッアウン（研究者招聘事業）
2004 年　ミョタンアウン（美術作家招聘事業）
2005 年　ワーヌ（第 3 回福岡トリエンナーレ）
　　ピョージー（第 3 回福岡トリエンナーレ）
2009 年　アウンコ（第 4 回福岡トリエンナーレ）
2010 年　アウンミャッティ（美術作家招聘事業）
2012 年　サンミン「現代アジアの作家Ⅵ　ガンゴー・ヴィレッジと
　　1980 年代・ミャンマーの実験美術」
2014 年　ミンティエンソン（第 5 回福岡トリエンナーレ）

▲ ポゥポゥ
「のぞき箱 2」1999 年
▲ ピョージー
「対立の妥協点」2004-2005 年

ミョタンアウン「信じるもののある生活」2004 年 ⇒